

新しいことを始めたいのに、一步が踏み出せない。誰もが一度はそんな感覚を抱いたことがあるのではないだろうか。

新規事業や新しい仕組みの構築など、頭ではやってみたいと思っても、へんからでは遅いのではないかへ失敗したらどうしようへという思いが募り、あきらめる人もいるかもしれません。

歴史上の偉人や成功を収めた経営者の中には、恵まれた環境から出発し、順調に歩みを進めた人もいます。一方で、決して良いタイミングとはいえない状況の中で思い切って一步を踏み出し、大きな成果を残した人も数多くいます。

こうした事実を知っていてもなお行動に移せない理由の一つに、年齢に対する思い込みや限界意識があるのではないでしょうか。しかし、世の中には年齢を理由に挑戦をあきらめなかった人が数多く存在します。日本で初めて実測に基づく日本地図を作製した伊能忠敬は、酒造業などで財を成した後、五十歳で家督を譲って隠居し、江戸に出て天文学を学び始めました。

師事したのは、当時三十代前半の幕府天文方・高橋至時です。伊能忠敬は、親子ほど年の離れた師のもとで、基礎から学んだのです。そして五十五歳で蝦夷地の測量へ出発しました。

その歩みは、決して華やかなものではありませんでした。一步の幅を一定に保ちながら距離を測り、夜には星の位置を観測して土地の緯度を割り出す。こうした地道な



## 一步踏み出した先に 新しい景色が広がる

作業を、その後十七年にわたり全国で繰り返しました。歩いた距離はおよそ四万キロメートルともいわれています。その膨大な記録の積み重ねが、後の『大日本沿海輿地全図』へと結実しました。

現代でも、定年退職後に新規事業を始め、地域に根差した会社を立ち上げた経営者は少なくありません。周囲から「今さら」と言われるような年齢で事業を始め、営業活動や商品・サービスの改良を地道に続けた結果、数年後には安定した顧客基盤を築いた事例も多くあります。

年齢は挑戦を阻む理由にはなりません。むしろ、これまで積み重ねてきた経験こそが、次の一步を支える大きな土台となります。伊能忠敬にとつて、家業で培った几帳面な記録の習慣が測量という仕事に活かされたように、大切なのは、いつ始めるかではなく、始めてから何を粘り強く続けられるかなのでしよう。

一步を踏み出すことは、決して難しいことではありません。年齢や状況を言い訳にせず、今日できる小さな行動を積み重ねることこそが、未来を切り拓く第一歩なのではないでしょうか。

もし何かを始めようか迷っているのなら、その迷いは挑戦への準備が整いつつある証かもしれません。迷いが完全に消えるのを待つのではなく、今できる小さな一歩から始めてみることをお勧めします。

その先には、これまで見えなかった新しい地図が広がっているはずです。